



那波文房一紙抄全

5
4586



門 五
號 1604
卷

門 5
4586

くせに哉翁

那をさへいふちみ

藤野 漸 氏
明治 四年 四月 二十日

藤野 深 氏 遺愛之記



そをせり 毘耶居士の丈室よりたると
深川からよまたたかして重た菴はさうと
世よりくまむし翁ありを重た経子世男の
そをせりの中へかた記をたつるをたつと
らふらふらあうくありをいふたつらうら
そをせりをたつらうく植てむとて菴の名をたつ
はひ母標はたつらうくひあまの天下色蕉の
おきれでたつらうく白格線おまひつたつ
そをせりをたつらうく常にいほめり西行の

と我よりをよくとせにありけりあまの世にけ
れははのあまのつとけりあまのたのまれぬ世に
此のちのほのうきむらうりあまのたのまれぬ世に
して同好あまのつとけりあまのたのまれぬ世に
る我もあまのつとけりあまのたのまれぬ世に
かくあまのつとけりあまのたのまれぬ世に
あまのつとけりあまのたのまれぬ世に
一黙 雷はなりあまのつとけりあまのたのまれぬ世に

文化会西

随斎のあまのつとけりあまのたのまれぬ世に

あまのつとけりあまのたのまれぬ世に
あまのつとけりあまのたのまれぬ世に
あまのつとけりあまのたのまれぬ世に
あまのつとけりあまのたのまれぬ世に
あまのつとけりあまのたのまれぬ世に
あまのつとけりあまのたのまれぬ世に
あまのつとけりあまのたのまれぬ世に
あまのつとけりあまのたのまれぬ世に
あまのつとけりあまのたのまれぬ世に
あまのつとけりあまのたのまれぬ世に

芭蕉翁のまのこめ野さうさうさう
初いと揺きてよりさきこそ草鞋もさ
あしとさうさうさうさうさうさう
負ふ花雪のそと風と奥の光さる
屏風は意ふ風と揺る波さうさう
つゆさうさうさうさうさうさう
中さうさうさうさうさうさう

積翠居のまのこめ野さうさう
みちさうさうさうさうさう
のさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
ゆさうさうさうさうさう
ゆさうさうさうさうさう
つげさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
まの野さうさうさうさう

つきて梓のりの沙汰不及し時今文代
十年一秋八月風れ共急しく浪々下り
あゝ自瓢くそと代自序也

[Faint bleed-through text from the reverse side]

點さし〜紀行翠園抄

○此紀行ハ貞享元年甲子〜桃青四十一歳
ちろ今世より〜甲子吟と題せり
ちの〜此記りも風國の海船集りせり
とも〜人少〜安永九年秋氏
門人波静再板せり此題号ハ許六ノ滑
替傳みぬ〜紀行の名あり〜
如〜題せり也

千里の路を〜三更月下
入無何と云々人なり〜の人乃杖より〜

○江湖風月集三山偃溪聞和尚の偈也

路不賚糧笑復歌三更月下入無何亦
平譙整閑戈甲王庫初無如是刀
負身甲子秋八月江上の破屋をいつる程
風の吹くそと浪真をま也

那ささら〜を心小風の志を〜

○山家集 十月十日 霜歸心日夜

ゆけい いちきね 浪 舟 神ろを けつ 歌

秋十とせら〜

○賈島詩 中客舍并州已十霜 歸心日夜

懷咸陽無端更渡桑乾水却望并州是

古郷をせ 誠 旧里 伊賀 東武 深川 舟 往 牙

故め此感あり

孫のゆ〜ら 海 海 山 皆 雲 舟 くれ くれ

霧〜と 進 舟 古 舟 ぬ ぬ 舟 南 舟 舟

○深川の菴より 常舟 富舟 舟 舟 菴 松 山

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

何某 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

莫逆の交 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

○唐楊寧與陽城為莫逆交

深川 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

○たせ〜 菴 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

富士川のほとりをけりみちつたうらなむ捨
子みまけみ泣けり此川の早瀬あけけ
うき世の波を凌ぐふゆえに海をうら
都竹宮と捨おき人小萩をもとれ秋の風
々言やちこらん涙すや志はきんと袂う
嗚お投てとちこるに

○源氏権もよみ初しちうく秋の山里

いづれも人小萩の落のかさたきれ○
撰集抄母法性寺殿の清所の子を
お梅の手ぬふつみてお母まよるま
ちうらなむ子やせんかちいほ

いづれ母と書そ捨しをい清あそ
てまい後中お新妻と成あ心て傳
正良縁とちこるよーんこる
猿を聞人捨子お秋の風いふ

○白船集みくの字疑一依て白選母猿
をきくと誤る○杜律聽猿實下三聲
涙○所いぬこめをて、物おそくきま
ゆくのちちちちおせき

いづれもや汝父は悪うれこの母ふも
いづれ父は汝をこめむめあしとてい汝を
いづれもよあらし唯も天みて汝の性

はしらのきつをききし

○本朝文鑑に此文を収めて佳曰捨子母秋
の風いづれも同じけりいづれもいづれも
いづれも但し辞を立す時の子殺の法
極有と書や富吉川の源もまや浮世の
浪みいひしる世川をいへいあめいしる
小菰の露、源氏の秋とあり母の好電
ハ莊子とて姓をいへる○素堂此評母富
士川の捨子、惻隱の心と云ふるに
早瀬を枕とて捨直ぐんさすも流し
と云ふおも、さるるは

あつらきみとて子ハあつらんとあつら
れとも昔お人の捨心も思ふとせむ
と云ふまじりしる也

大井川越とて強とての源とて

秋のつれもいづれも捨折人大井川とて

る上り

○素堂の評母山崎某の臺をいへる
むしけりしる所いづれも其色ちとてい
○滑稽傳母捨母をいへ破了とてい
正風評をいへる野躬恒貫之の本情を評

てぬて引の木の榊くもみくられ
とやさきくう ○朗詠集み松柏千年終
是朽槿花一日自為榮

かひ好うの月うすいこえて山の松陰い
くきみこる上み難をるもきてる森里い
おのちみく杜牧う早のの妙夢小秋の
中山みくるも思ひきく

るめ舞て妙夢目きく 桑の烟

○杜牧早行 垂鞭信馬行 牧里未鶏鳴
林下帶殘夢 葉落時忽驚 霜凝孤雁廻
月曉遠山橫 僮僕休辭險 何時世路平

和葉を風暴、伊勢み存るるを尋るるに
十とくう足をとく心標問ふ寸鉄をおし
襟み一囊切のけて手み十ハう珠を推り
傍み似て暮返りし何み似て驚ちり 我
何み似ていこも浮屠の属み多し
て神歩み入るるをゆきす

○浮屠又浮圖は梵語也又曰塔婆譯曰

高頭按るみ寺院の通稱も田中故り

僧のものをまきくちのく

まらふ外宮み修てけらるる一の表
の暮のくく 浮屠をくみくく又上

あまの峰の如く身ゆゑむらゝ海もいゝ海
とて起し

みろ月ちし子とせの如く抱はれし

○素堂譯女ゆきしつ山田、京の神橋を
いそぎしつちとせいおまじつていあまの
おんしちとせとく知しあまのいそぎしつ
つらぬ○西に物語の神路山の如くあまの
峰の如くあまの雲流川の流よとせし海を
さしつちとせとく海神の如くあまのいそぎしつ
あまのいそぎしつとくあまのいそぎしつ
あまのいそぎしつとくあまのいそぎしつ

光もいそぎしつとくあまのいそぎしつ

○梅もあまのいそぎしつとくあまのいそぎしつ
あまのいそぎしつとくあまのいそぎしつ
あまのいそぎしつとくあまのいそぎしつ

あまのいそぎしつとくあまのいそぎしつ
あまのいそぎしつとくあまのいそぎしつ
あまのいそぎしつとくあまのいそぎしつ

○素堂譯女ゆきしつとくあまのいそぎしつ
あまのいそぎしつとくあまのいそぎしつ
あまのいそぎしつとくあまのいそぎしつ

世のついでにさあはるる原店にみまきあはるる
といひたる女はるる名はあまのついでに
結をせしむるよふに付たる

兼の巻也てふの翅もくちまはるる

○左傳曰蘭有國香人服媚之○赤草紙
此の白のあはるる原店のついでに
てはるるついでに
内少清一室如料紙持てて白と影つて
女の白のあはるる原店のついでに
の喜とれはるる先のついでに
世をまはるるついでに

ついでにあはるるついでに

あはるるついでに
の老人のついでに
ついでに白のあはるるついでに
ついでにあはるるついでに
ついでにあはるるついでに
ついでにあはるるついでに
ついでにあはるるついでに
ついでにあはるるついでに
ついでにあはるるついでに
ついでにあはるるついでに

久米仙人、物はふ女のくまの白きとらん
通る矢ひんいりともかき足らん
のきくつよ肥ゆつりつきあめく人のあのを
ちりつゆくとまゆらん

田人の夢余をくしり
芳格を竹四五本のゆらゆら

○聯珠詩格劉改之詩如翠竹無多笋下
奇止憂喧恬俗人知清風自足老僧用
只是窓前欠好詩

長月の初古々よゆつて北堂の萱草平山を
ま果てると詠くめちり

○北堂又萱堂氏毛詩云焉得萱草言櫛
之背注萱草令人忘憂背北堂也

何るもや〜みま〜
眉皺あ〜たるあ〜
ち〜の〜の〜
ら〜の〜の〜
あ〜と〜と〜

○樂天、詩五年終四十鬢如霜

大和の國めりゆ〜
り〜と〜と〜

足をも休む

○行脚ハ事苑ニ謂遠離郷里脚行天下
晚情捐累尋訪師友求法證悟

もくろや隠居もあつて心竹の奥

○素堂譯也くろくをねん毫もくろくをみ

舟四出幸の宛知と強家子とせんとはあむ

とくろくをけ世人とくろくを

是くも少海事々の莖そくろくをむけ

くろくをけりりのを進くろくを

二上山高庵もくろくを庭上のねんくろくを

くろくをせもくろくをくろくを人方す牛をか

ともい石一人は是非情といて母佛縁也

ひふて谷舟の衆をほめくろくをくろくを

くろくをくろくを

傳教も海くろくをくろくを法のる

○和州巡覽記也當麻寺ハ又禪林寺といふ

用明帝弟四百皇子麻苗子親王の建をくろくを

○白氏集題流溝寺古松烟葉葱記蒼

塵尾霜皮駁落紫龍鱗欲知松老看壁

壁死却題詩幾許人

獨よく舟の奥みくろくをくろくをくろくをくろくを

海くろくをくろくをくろくをくろくをくろくを

家愛しむちのこころを代るる東の
 ひき流すの鐘の音、心の底みこころ昔
 よう此山み入て母を忘るしこころみましくわ
 詩のよき歌う候るいてや唐土の廬山と
 いふんまのこころを

○廬山山南康軍山北是九江郡山中有
 三百六十余寺天下第一勝地也

破おそく我みまのせうや坊の書

○朗詠の擣衣碓上、俄添怨別聲、○評林小
 こころをくえの山は秋風まよふけを
 こころをくえの山は秋風まよふけを

こころをくえの山は秋風まよふけを
 評し兼るの坊の書、坊の書よきあは
 このころん昔得陽の江乃ほりまき樂天
 を信しこころをくえの人の書の名くちを
 坊の書よきあは坊の書よきあは坊の書
淨陽の琵琶行
 古文前集也 ○梅の書よきあは坊の書
 よて喜藏院南陽院ちよりの書常の寺
 坊の書よきあは坊の書よきあは坊の書
 よて喜藏院南陽院ちよりの書常の寺
 坊の書よきあは坊の書よきあは坊の書
 よて喜藏院南陽院ちよりの書常の寺

西上人の草花菴の詠ハ奥の院より右の
二町をりまけり此の紫人のうらふま
のうらふまをうらふまのうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを

○西の法師の歌

うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを

及撰集抄ももえは詠調あはは
の詠もおもえは詠調あはは
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを

○扶桑日本の一巻之車山海経淮南子

山をたけり坂をたけり秋のうらふま
うらふまをうらふまをうらふまを
帝の御廟をたけり
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを
うらふまをうらふまをうらふまを

○順徳院御製 引あやめき新徳の
 志のふも程はるくはるまじしきうら
 ○撰集抄の 新徳の生業はるをおも
 なるもや あり 月しや君むの玉のゆ
 とくもあらん後い何もあそん
 ち知よう山城をゆるぎ 近江路めく美濃
 路もゆるぎ 山中をたふし 小しき書
 の場は伊勢の守武、いひゆる義朝殿の
 如くも秋風をたふしきものあり 如くも
 義朝殿
 うし 朔の心よ 秋乃風

○評林の 守武、さだんよ 朔の氣性の
 一句の詮まよし 〇句解の 朔の句の内
 海の秋風を酒を 〇句解の 朔の句の内
 了 歐陽永叔秋聲賦曰夫秋刑官也
 於時為陰又兵象也於行為金是謂天
 地之義氣常以肅殺而為心 〇説叢の 朔
 は守武、理屈をこころし 今我の
 と秋風の義朝、心よ 朔の句の内
 秋風の義朝の心よ 朔の句の内

ちりり〇梅もめち武千句も同くも也
鱗の里之海もらんとしよあ白く月一朔
殿も州も秋風と附く此海心も月
又そやとつふ秋風と付る好もあふ
ふ〜朝と付る月をえてとる好の海
一う〜とらん義朝のまほめと青の秋風
はよ〜朝も州も付るもさる魚一
兵象肅殺おのり也とハ〜とらん人
説義の流のとき義朝も州も秋風
いんも秋風も州も〜朝といんも
いつき同〜とらん人等守る武の

句あ白一附付もま〜も〜白の上ハ何也
何〜もま〜とらん人等守る武の
のあ〜とらん人等守る武の
るのあ〜とらん人等守る武の
心〜とらん人等守る武の
幸姓の殺も州も秋風と附る
ち〜とらん人等守る武の
原信朝大朝も州も〜とらん人等守る武の
後白河上皇は〜とらん人等守る武の
御法〜とらん人等守る武の
免〜とらん人等守る武の

男の位西をささるん〜朝を〜
義朝勢もあつて清盛を〜人自
心す平治元年十二月平朝大將ふさ
合戦す信賴誅せらるる明承元年
尾張國那珂みへ長田志宗み殺せらる
時か〜十八歳なり朝妻常盤美人なり
清盛女毒ともなる

不破

秋風や薨もささけも不破の關

○新古今集み人すぬぬ不破みせまや
のねを〜河を〜信を只秋の風

大垣妙所り〜秋ハ本因の家を〜
と〜氏孫孫を〜時ねを〜心
子おもひて旅さるる

志みも〜旅旅の果〜秋の果

○〜那は〜の思ひ合す〜

業名本當寺也

冬牡丹子さ〜やらねを〜

○琴白集み鉢を〜味〜の〜
冬のねちち〜味に〜きす定家の雅
題古その中深山よ〜冬も吹〜人
おも〜き〜も〜を〜

子の枝も後ろきくはるほめくらも魚小
候あうこつちさめ

明も乃や白魚走るきさう一寸

○葉名の魚も海人ら思もさうも國

の守めなる今も強すらうやの素も海

み素名の海をさうてふ魚のらきい魚

おを切を梨衣とも字いさきよらみ

似ら天然二寸の魚といひる人も魚

やららるん○梅も母杜子美白小詩天然

二寸魚さめも子もあもさうこ

熱田神社大母娘遊樂地

草村めらうこらうこらめ運をさうて小社の

迄をさうこらめをさうてさう神と

名のさうまきさのなまら後のさめけさ

らちうあししよめさうまよらうもらういさ

まららららら枝を梅も中らうらら

○熱田二哥仙み、神家の茶店まらららら

名護屋み入さうかおと風吹す

狂句本枝の身も外もあめららららら

○冬を集げ白のあめあめさうまららららら

みららららららららららららららららら

まららららららららららららららららら

受くも昔ね歌の女は国子たよりし
 るもふと思ひのこころ中侍る○七部捜ふ
 夫を白海きこも味ありや志くは先代
 ちよとわかされし、女は秘る古人より秘る
 説きもね歌の女と語りしは女我
 方の心もいふは、さもあはれさる
 らかして竹もね歌よも交もね白
 らかして人志あはれさるの女は、あはれし、海に
 のはあはれし、さもあはれし、翁近は後門人
 かね白のこころをさるる、あはれし、あはれし、
 らかして、あはれし、あはれし、梅もあはれし、あはれし、

惜るつらもあはれし、あはれし、あはれし、あはれし、
 醫師あはれし、あはれし、あはれし、あはれし、
 とくもあはれし、あはれし、あはれし、あはれし、
 跋み粟といふ一書其味四つあり、李杜、心
 酒を嘗て、寒山、法粥を啜る是れあはれし、
 下もあはれし、あはれし、あはれし、あはれし、
 使と風雅のよあはれし、あはれし、あはれし、あはれし、
 山家もあはれし、あはれし、あはれし、あはれし、
 とくもあはれし、あはれし、あはれし、あはれし、
 選にわける胸中故、茅渟、女あはれし、あはれし、
 亦よあはれし、あはれし、あはれし、あはれし、

此頃、白端のそりえ福の妻相り物ふも
阿比のむらんやな甲おむのきりくさ
きしを後めあぢよの一字をそそ名き
おくれぬきめらむしむとま来お小
こえく此相白の二字やまう作る由
相取我ん相白とまうのまう
小文めたまむむむむむむむむむむ
の中せ物ひりうらめなつて風つた
といふ、神よりまむむむむむむむ
くんくんくんくんくんくんくんくん
くんくんくんくんくんくんくんくん

下書
くの後相白のそりえ福の妻相り物ふも
阿比のむらんやな甲おむのきりくさ
きしを後めあぢよの一字をそそ名き
おくれぬきめらむしむとま来お小
こえく此相白の二字やまう作る由
相取我ん相白とまうのまう
小文めたまむむむむむむむむむむ
の中せ物ひりうらめなつて風つた
といふ、神よりまむむむむむむむ
くんくんくんくんくんくんくんくん
くんくんくんくんくんくんくんくん

こころしお森のしほ 友の全神は影
みづろお海

草杭大も

○新

いともめれや

そらんめ

市人

○笈日記

て是

報の

以市尊行可以加入

旅人

馬

○笈日記

らん

お

と

と

と

と

と

と

海をみかきつらして

海をみかきつらして鴨のきりばらみら

○古今抄み 可なりぬ白の信教の才山まきまめ

海をみかきつらして鴨のきりばらみら 若二幸い

天和の比のゆえ是ホハ何の世やゆらぬ人

求めつらむゆききつら

なみそ子難をとりまかしてみ枝を捨て難後

ちうしよきつらむきつら

車くまめゆききつら

○素考呼みまきつら

海をみかきつらして 是ちうん海世れ難

海をみかきつらして 知つらむ

○山家集み 陸奥まきつら

なみそ子難をとりまかして

海をみかきつらして

とみひくも山家みまきつら

海をみかきつらして 齒余み解れ

○接み田舎まきつら

海をみかきつらして

海をみかきつらして

海をみかきつらして

あまもや水の修けを背けたる

○二月堂ハ羅素院と号す本堂ハ観音ニ
美杖の井はく名杖の玉杵を明神附伽
をちかきふと云一とせ早してあちて座修
井のちかきふと云美杖の玉杵を明神附伽
あまもや毎季二月十日末之二月の終
と云あまや垢齋場ちかき一書こまうは修と
はくは修集小み座と云もみ氷と云は
系あまあまや之井秋風を吹修の山家
と云と云

梅林

梅くきあまや修を吹修

○林和靖傳み林公通字君復結廬西湖之
孤山賜謚曰和靖先生筆談曰林逋隱居
孤山常蓄兩鶴縱之則飛入雲霄盤旋久
之復入籠中逋常泛小艇遊西湖諸寺有
客至童子出應門延客開籠縱鶴良久逋
歸常以鶴飛為驗○林和靖詩疎影橫斜
水清淺暗香浮動月黃昏○素堂評西湖
湯あまや二井也秋風の梅林を吹修の山家
や修を吹修と云と云は修を吹修を吹修
と云梅を吹修と云と云と云と云と云

ころ草むくけ乃白のりめめん
か〜〜〜〇吉東抄抄抄抄抄
古集集集集集集集集集集集
ち〜〜〜は白ゆつ〜〜〜是ホま物
の心を難〜〜〜毎くま白つわ〜〜〜やめ
とや秋風う海海の集集集集集集集
吉山家小田所〜〜〜詩詩詩詩詩詩詩
詩人をや〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と
言ふ〜〜〜と風給強人の人〜〜〜と〜〜〜と
う〜〜〜と先海の心は偏論を〜〜〜評者
の心は偏論を〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と



山終る〜〜〜やせ詩を〜〜〜め〜〜〜偏論
〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と
又白神の物〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と
子亥一巡の後評と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と
櫻乃木の花め〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と

〇熱田三奇仙小一割す〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と
つ〜〜〜と杜風〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と
の〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と
〇説叢取
櫻の花の白とせ〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と

伏見西岸寺住口上人の巻
〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と

○淨土宗西岸寺三世寶譽上人俳名任
大津みささき山崎をさえて

山崎みささきのやうゆうのまきまき

○素尊母山崎まきのまきまきの

むくけいさうまきのまきまきの

○まきのまきまき山崎まきのまきまきの

まきのまきまきのまきまきの

有房々のまきまきのまきまきの

まきのまきまきのまきまきの

人のまきまきのまきまきの

川まきのまきまきのまきまきの

つねまきのまきまきのまきまきの

湖名の眺望

まきのまきまきのまきまきの

○新治系母伏見まきのまきまきの

まきのまきまきのまきまきの

ハ大津尚らまきのまきまきの

まきのまきまきのまきまきの

のまきまきのまきまきの

まきのまきまきのまきまきの

まきのまきまきのまきまきの

中ちの秋はみちけつとて是秋のさきひ
知さるるおほき道一人さしてける誠心
御持の眉前をひらきももるる
切きさしきさる人の極めさるる
の姿をまゐるるゆゑにやめやと不審
しるるさきみ哉とありのさるるさき
中をさきさるるさきさるるさき
さきさるるさきさるるさき
かきさるるさきさるるさき
さきさるるさきさるるさき
さきさるるさきさるるさき
さきさるるさきさるるさき

此篇を再ひ尋み申す述作れと一句の句意
よおわるといふこと但ち方寸おとよ
かみちさしきさるるさき
さきさるるさきさるるさき
さきさるるさきさるるさき

水口みと二十歳を結て故人あきさ
あきさるるさきさるるさき

○宋之間、詩に年々歳々花相似歳々
年々人不同

伊豆の國軽、小倉山の葉門是も去年の秋より
けしあさるるさきさるるさき

此僧中女告て曰圓覺寺の大顛和尚を
○桑門、沙門の言語は法恩珠林に詳也
いさゝか女種をいふ事あり

此僧中女告て曰圓覺寺の大顛和尚を
睦月のそとに近化をいふ事あり
心地せしむる事あり其角久許一やき引
梅くしむる事あり

○鎌倉圓覺寺大顛和尚俳名を呼ぶ事あり
其角久許とす事あり新山家集にあり
梅くし睦月の近化をいふ事あり
中梅くしむる事あり

杜國少ねくも

らけ〜みちも〜蝶の形をいふ

○杜國はももをいふ事あり
〜相葉ももをいふ事あり
〜とす事あり

牡丹蕊をいふ事あり

○幽篁集にあり
〜相葉ももをいふ事あり
〜思ひももをいふ事あり
〜牡丹蕊をいふ事あり
〜牡丹蕊をいふ事あり
〜牡丹蕊をいふ事あり

甲斐の山中めふふあつ

りるまふらうしんまじやうりつふ

○甲斐のむし駒ふらうりつ國之○東坡紀行

の詩ふ近山辭麥早

お目れ末乃み松のつし松をそくくつたやま

ちうつえいよく風張りしめくさく

○東坡詩ふ窓前捻半風

○東坡詩ふ窓前捻半風
記行翠園抄終

臨

那さうらーは風のまうらーこの

紗めらうまうらうまう人まうらう

まうらうまうらうらうらうまうらう

まうらうまうらうは字包うまうらう

まうらうまうらうまうらうまうらう

まうらうまうらうまうらうまうらう

まうらうまうらうまうらうまうらう

まうらうまうらうまうらうまうらう

中
 の
 様
 子
 は
 大
 変
 好
 転
 した
 こと
 が
 分
 かる
 今
 は
 大
 変
 快
 楽
 だ
 り
 と
 申
 せ
 ます
 御
 醫
 生
 の
 大
 功
 御
 禮
 申
 上
 せ
 ます

仁徳堂製
 枕



天下一方
登龍丸
 食物一切
 壹粒入
 一包代百文
 七粒入一巡
 代六百五十文

此丸は天下第一の妙薬なり。秘法にて煉製し、故に病は速に癒え、十年十年の病も治す。痰喘、嘔吐、腹痛、吐瀉、嘔逆、胸膈、痞塊、疝氣、婦人經痛、小兒疳積、諸般の病、治す。

- 一 小兒百日咳
- 一 嘔吐
- 一 嘔逆
- 一 腹痛
- 一 吐瀉
- 一 嘔逆
- 一 胸膈痞塊
- 一 疝氣
- 一 婦人經痛
- 一 小兒疳積

抑度咳と業昔より法の虫物もわたくし業業もわたくしにありては六神咳の云に及
 むに咳痛志わくもその業にありては咳と業業もわたくしにありては六神咳の云に及
 るる業のなりけり此業能九業久き咳咳苗飲て医藤子をしては百業と
 用ひては業業の咳咳もその業にありては咳と業業もわたくしにありては六神咳の云に及
 咳咳一人として治せるは咳咳と業業もわたくしにありては六神咳の云に及
 咳咳速なるといふも下業業の咳咳もわたくしにありては六神咳の云に及
 咳咳用ひては業業の咳咳もわたくしにありては六神咳の云に及
 咳咳上た志るは業業の咳咳もわたくしにありては六神咳の云に及

東叡山 御書物所 江戸下谷御成道 青雲堂 英文藏製 蘭雪

系於之系	出雲古文及布	小島法系	正文半利吉清	桑州福高	光白屋法二系
大板心高	河内屋茂吉系	日孫子	飯田屋利吉清	日不	近江屋三系
尾州名古	永永屋系吉系	日吉	本屋劫次系	茂及系	小田島高俊系
尾州名古	海野屋系吉系	日吉	本屋劫次系	茂及系	小田島高俊系

